

## 僕は後悔していない

別に、彼女も忙しそうでもなかった。

僕も、庭をぼーと見ながら、

「さっき、男の子が家を出て行ったけど、弟さん？」  
と、尋ねた。

「見たの？」と、彼女はまた笑い顔になった。

玄関で、誰かの声が出て、彼女が応対に行った。

僕は、また、立ち上がって、庭の縁側に出た。

彼女が戻って来たとき、僕は、縁側寄りの、  
彼女の椅子のそばに立っていた。

今度は、彼女が僕の椅子の方に座った。

その隣りに僕は座りたかったが、  
そのまま、彼女を正面に、庭を後ろにして僕は座った。

これ以上、長い居すると家の人が帰ってくると思った僕は、

「ほな。」と言ったが、その後、言葉が続かない。  
「さいなら、おおきに」と、言いそうになったが、

僕は、そうは言いたくなかった。  
本当は、もっと彼女と一緒にいたい。

自分が椅子から立ち上がるのを、自分で観察しながら  
僕は大変悲しくなった。